伊豆半島

岩波写真文庫　138

岩波写真文庫 138 伊豆半島

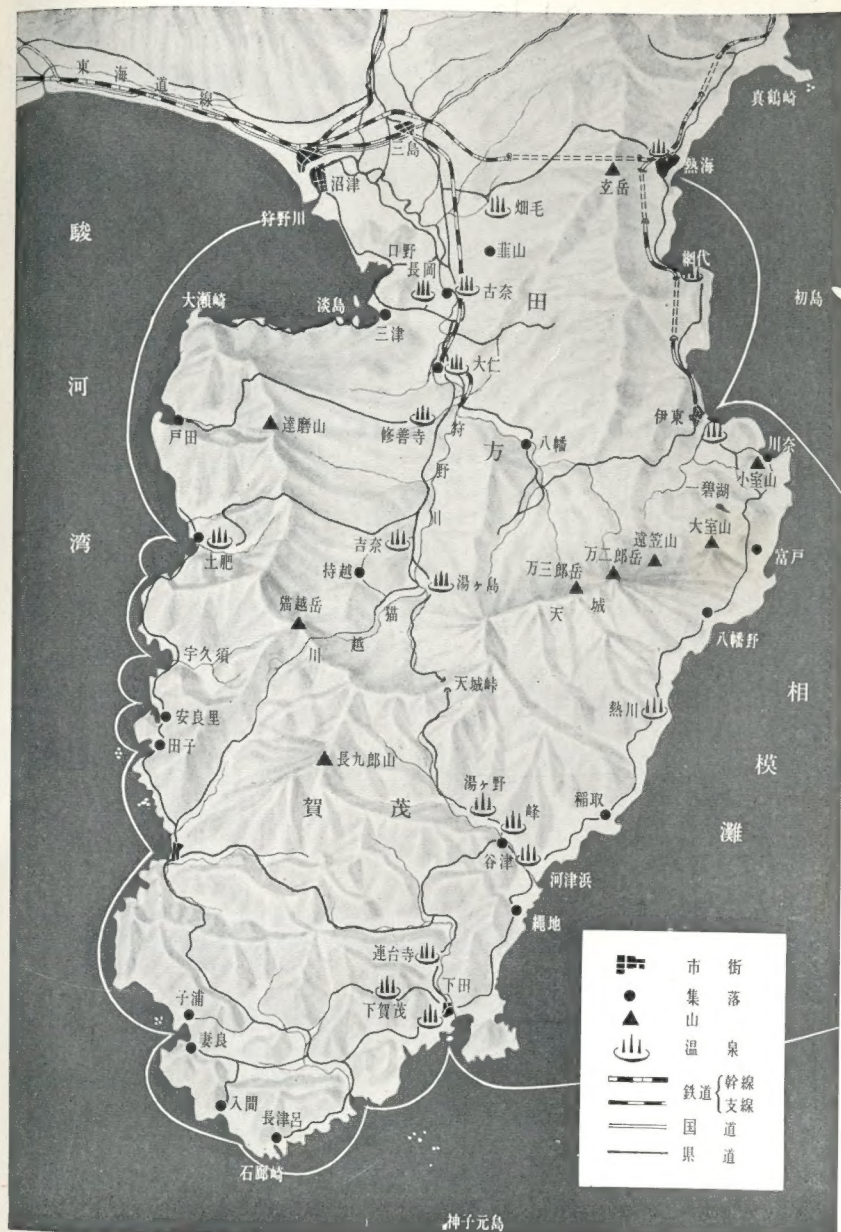
編集 岩波書店編集部
写真 岩波映画製作所

はじめに

日本は島国であり、加えて半島が多いから海岸線は長い。半島は狭い範囲に海と山とをもつからそれぞれ特長のある美しい風景を形成する。北国は北国らしく、南は南らしく、風景のみならずそこには異なった生活がある。この本で取りあげた伊豆は、数多い半島の中でも最も有名なものである。ここには温泉が多く、東京を近く控えていること、暖いことなどの条件によって訪れる人も多い。しかし、その人々は伊豆の或る温泉を訪ねて行くのであって、伊豆を隅々まで歩くということは少い。だから、伊豆へ何回行ったといっても、伊豆を知っているとは言えないはずである。われわれは単なる観光客でなく、この半島の美しい自然と歴史を探り、人々の生活を捉えることに骨を折って見た。

目　次

定価100円 1955年2月25日 第1刷発行 1958年4月20日 第5刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

大島
利島
新島
式根島
箱根火山群
相模湾
大室山
天城山
達磨山
駿河湾
愛鷹山塊

富士山頂から伊豆半島を望む

（撮影　志崎大策氏）

十国峠附近から伊豆東海岸を望む

愛鷹山麓から伊豆西海岸を望む

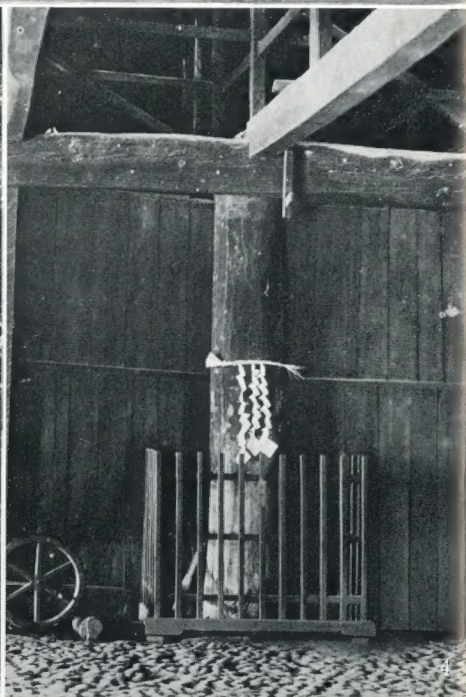
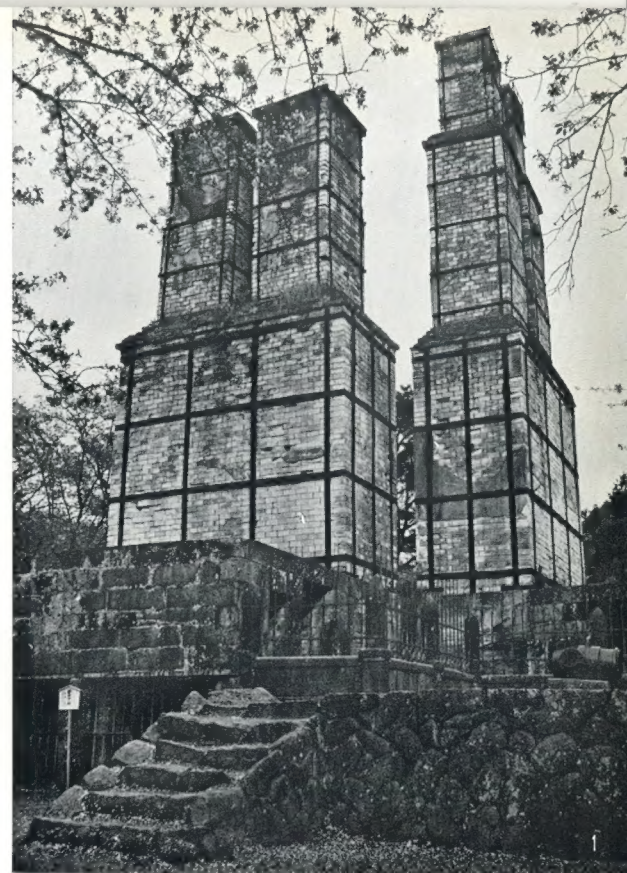
伊豆半島は北部の狩野川の流域を除けば殆んどが山地である。その脊梁をなすものは、富士火山帯に属する熱海、天城、猫越、達磨の四火山体であるが、これらはいずれもかつては海底火山だったという。火山の噴出や地盤の隆起により、順次、島と島が連なり、本土にも接して、この半島が出現したと考えられている。しかも、太古に於て断層陥没、地盤の隆起沈降を繰返し、東西両海岸では断層による陥没は著しい。伊豆半島で山が海に迫るところが多いのは、主としてこのためである。

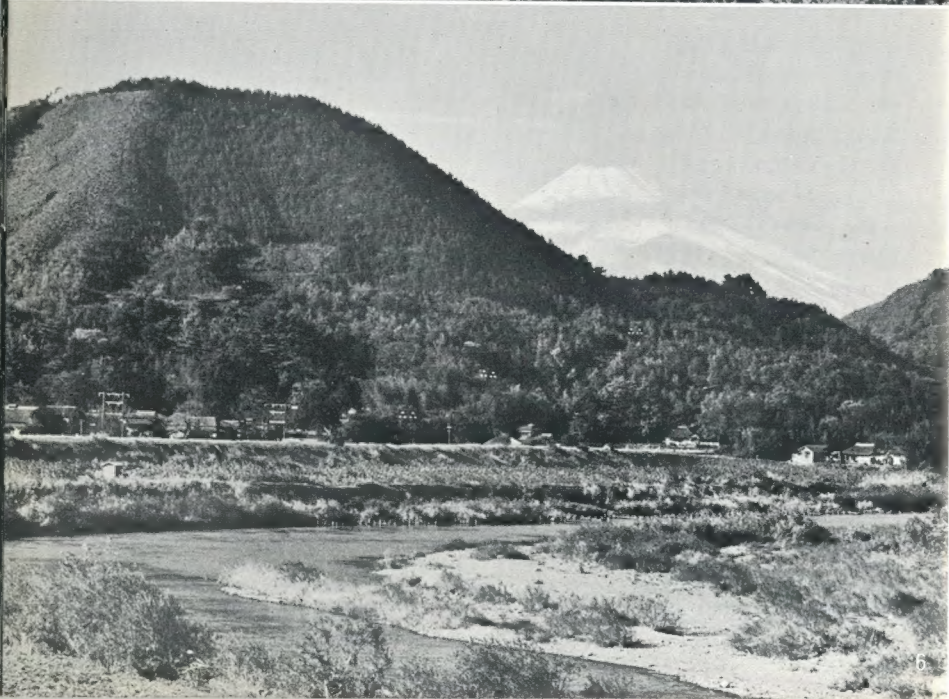
口伊豆

平地の少い伊豆半島では、狩野川に沿った田方平野が唯一つの農耕に適したところである。しかも、東に箱根連山が高くそびえ、西からつづいてきた平野をここで区切っている。そこで、先史時代から西日本の文化はここに吹きだまりのように積っていった。韮山村山木にある彌生式時代の遺跡は静岡市の登呂にも匹敵する農耕関係の遺物を多く出土し、昔の伊豆を知る重要な手懸りの一つとなっている。口伊豆はまた、日本歴史の縮図といわれるほど、歴史の潮に洗われてきたところである。中世に流謫の地となった伊豆は、特に口伊豆に公卿、武将、傑僧の多くを迎えた。伊豆から平氏討伐ののろしを上げた源頼朝もここに流され、壮年までここで過した。さらに、戦国争乱の風雲児、北条早雲が駿河より入って韮山城によるなど、口伊豆は波乱に富んだ歴史を持ち、その史蹟が多い。口伊豆の西部は丘陵をぬって駿河湾に開け、その海岸は、富士山を背景とする美しい風光で知られ、平野を流れる狩野川のやわらかな風光とともに人々の心をとらえてきた。狩野派の絵もこの平野で誕生した。

伊豆半島に入るには，熱海から伊東を経る道筋と，三島から田方平野を南へ下る場合と，沼津から海岸沿いに行く三つのコースがふつうである．いまは，伊東や修善寺まで鉄道が開けているので，これを利用する人が多いが，急がぬ旅なら江浦，静浦と内浦湾沿いに西海岸を下るのも伊豆半島を知るのに必要だろう．湖水のような静かな海に淡島④，瓜島，布島などが浮び，振り向けば富士が見える風景が訪れる人の心をとらえるにちがいない．この附近①③④⑤⑥は古くから漁業のさかんなところで，その漁業制度にも興味のあるものが多く残されているという．西海岸から田方平野にでるには，口野，三津から長岡，韮山附近にぬける．その田方の中心地，三島は，かつて伊豆国府のあったところ．伊豆国の一の宮としてあがめられた三島神社②がある．

流　刑　の　地

頼朝が狩野川のほとり⑤に流され約20年を過したという蛭ヶ小島⑥は昔は川中島だったというが，いまは水田に囲まれて碑があるにすぎない．頼朝の心に平氏討伐の情熱をうえつけた文覚上人の流寓は，この北，奈古谷にある．また頼朝をたすけた北条時政も当時同じ村に住み，その墓④は近くの願成就寺②の一隅にある．この寺は頼朝の奥州征伐に際し時政が戦勝祈願したところで，ここには足利政知の子，茶々丸の墓③もある．政知は義政の弟で京都から下ってこの地に堀越御所といわれた居を構えた．願成就寺に近い場所だというが，遺跡ははっきりしない．その頃築いたという韮山城は延徳3年(1491)当時まだ伊勢新九郎といった北条早雲が茶々丸を殺して拠ったところで，後に北条氏親が秀吉の軍をむかえて籠城した城でもある．①はその城址．

韮山の反射炉①②は江川太郎左衛門の死後，暴風のため破壊したのをその子，英敏が再興したもので，安政5年(1858)から数ヵ年の間に数百門の大小の砲がこの炉で熔された鉄で作られた．現在のものは昭和5年の伊豆大地震で破損したのを補修したもの．反射炉とややはなれて江川邸③が残っている．凡そ700年前の建築で立木をそのまま主柱にした④大茅屋である．邸内の裏手にある七尾神社⑤には英竜の作ったコマ犬がある．

幕末の韮山

伊豆半島に於ける近代への胎動は韮山を中心として起っている。幕末の英傑江川太郎左衛門英竜がこの地に育ち、ここを舞台として活躍したからである。江川氏は源満仲の次子頼親の後裔といわれ、頼朝を助けた功により江川庄を与えられて、後に徳川に仕え、代々韮山代官を世襲してきた家柄であった。英竜はこのような家に生れ、早くから蘭学を修めて、砲術や洋式の測量、練兵などに長じていた。彼は代官として伊豆、駿河など五ヵ国に散在する幕府の直轄地を治めたばかりでなく、幕府の鉄砲方も勤め、勘定吟味役まで登るといった忙しいなかで、海防に意を注ぎ、ついに大砲の鋳造を思い立ちまず小反射炉を作った。ついで、安政元年（一八五四）には韮山の大反射炉の建造に着手した。そのために耐火煉瓦の原料となる土を探し求め、漸く奥伊豆の梨本附近で適当なものを見出したという。翌年に反射炉は完成し、これはいまも残っている。英竜はこの反射炉の完成後いくばくもなくその生涯を閉じたが、韮山にそびえる高さ一六メートルの反射炉は、ここを訪れる人に当時をしのばせる。

修善寺まで

田方平野を狩野川に沿って南へ下ると，両側の山地が次第に迫り，平地は扇状にせばまる⑤⑥．長岡町①②③も，このような平地にある温泉町の一つ．富士山が間近に見える温泉地だ．古奈山をはさんで古奈温泉と長岡温泉に分れていたが現在は両者を合して古奈長岡温泉と呼ばれる．古奈温泉は「吾妻鑑」に小名温泉として名が見えているほど古い温泉で，頼朝も入湯したと伝えられるが，長岡は明治末期にはじめて試掘したというから伊豆の温泉では新しい．どことなく華美に感じられるのはこのためだろうか．また，平地の温泉が発展するためにたどる一つの道なのであろうか．いわゆる温泉情緒はこまやかだという．長岡の南，大仁温泉には競馬用の馬のための温泉④がある．さすがは湯の国，伊豆である．大仁までくれば，修善寺は近い．

1

伊豆の温泉

伊豆半島に平地が少く山間の盆地も乏しいのは火山のためである。しかし、反面、この火山が半島に豊富な温泉をもたらし、訪れる人を慰める。四〇に近い温泉が小さな半島内に湧き、このようなことは他にその例を見ない。この温泉の大部分は天城火山の周辺に分布している。

この火山の活動により、猫越、達磨山系などの古い地層との間にできた地裂線に沿って澄んだ湯が湧き出しているからである。したがって、これらの温泉は、あるいは海にのぞみ、溪流に沿い、あるいは平野に、山地にあるという変化に富み、それぞれが独特の趣を持っている。伊豆の温泉の特色は、このような性格のちがう温泉群であることだろう。それだけに、伊豆の温泉について、おしなべていうことはできない。ただ、一、二を除いてどの温泉場にもいえることは、無色無臭の清潔な湯と、それをとり巻く自然と人とがかなでるアンサンブルの好ましさであろう。私たちがその一つの例として立寄った修善寺温泉は、歴史のある温泉として、また源氏一門の悲劇の舞台として知られ、平野から山へかかる場所にある。

2

4

5

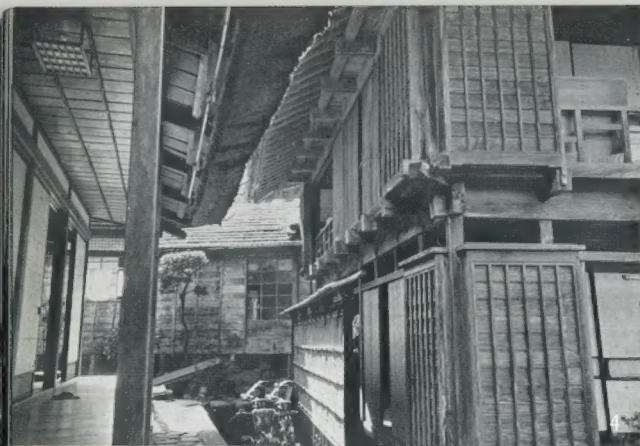
6

3

寺のある温泉

修善寺温泉①は，もともと修禅寺②の寺領に湧いた温泉である．それが明治初年に一般の手に渡り，寺の名を一字かえた修善寺温泉が誕生したのだという．したがって温泉旅館が建てられたのはそう古いことではない．しかし温泉は大同2年(807)に弘法大師が発見したと伝えられ古い．その折，独鈷で掘って湯が出た場所がいまの独鈷の湯④⑤⑥といわれ，いまでも一般の人に開放されている．もとは，この種の湯が多かったが，いまは，独鈷の湯のほか二，三を数えるにすぎない．旅館の数は30をこえているが，大規模な温泉場にありがちな喧騒さは少く，ひなびた静かさを保っている．この温泉が持つ，歴史と伝統の故であろうか．宿の番頭も長い間変らないという．漱石がその大患の身を横たえた旅館がいまもある．しかし，漱石の聞いた修禅寺の太鼓の音は今は聞かれない．

修禅寺物語

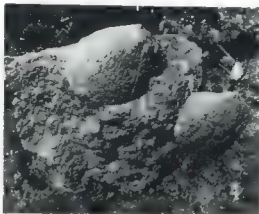
修禅寺③は，源範頼が兄頼朝の猜疑をうけて幽閉を強いられ，ついにはその命さえ絶たれたところだ．建久4年(1193)というからいまから数百年の昔のことだが，それから10年後には，頼朝の長子，二代将軍頼家も外祖父北条時政の讒にあってこの寺に幽閉され，その翌年には浴室で虐殺されたという．時政もやがて失権して出家し，同じ寺にしばらくの間いたといわれる．かつて自らの子を死に追いやった母政子が，その冥福を祈って建てた経堂指月殿①が近くにあり，その傍には頼家の墓が建てられている②④．頼家とこの地に住む能面作り夜叉王，およびその美しい2人の娘との物語「修禅寺物語」は全くの創作だが，指月殿のそばにはこの架空の人物の墓まである．範頼の墓も町外れにあるが，たしかなものでないらしい．

湯ヶ島まで

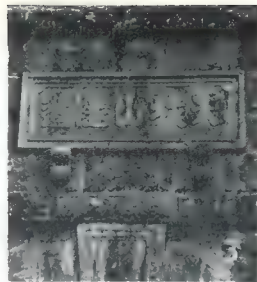
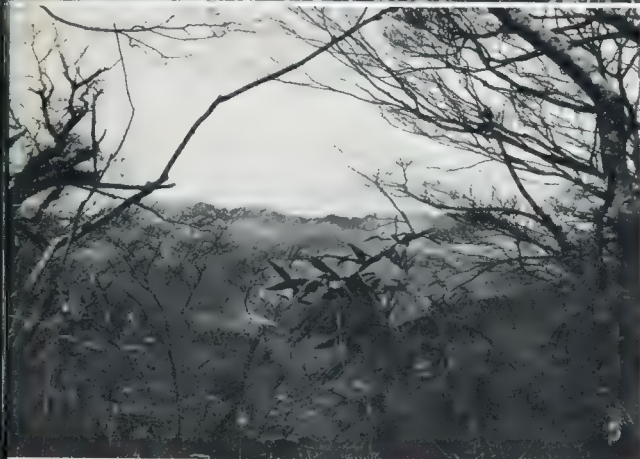
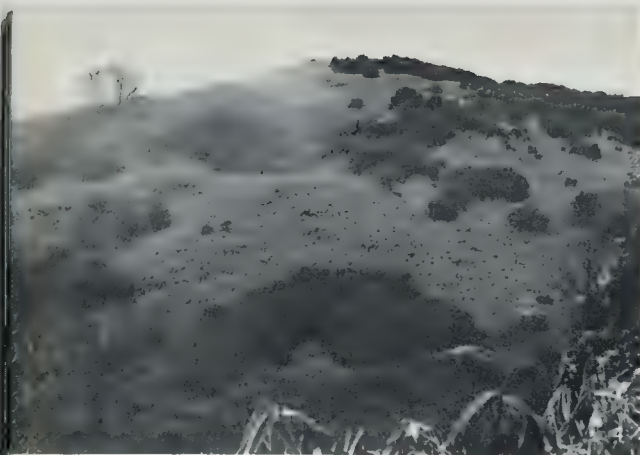
狩野川に沿って走る下田街道を行くと，道はゆるやかなのぼりになる．谷は次第にせばまり，田畑も目立って少くなる．川の上流をのぞめば①，天城，猫越の山系に属する山々が連ってみえ，風景もどことなく，山村の素朴さがあふれてくる．街道に沿っていくつかの温泉が点在し②，なかには一軒しか旅館のない温泉もある．修善寺のように温泉の名が寺の名に関連のある吉奈は奈良時代に既に栄えたところで，旅館の建物も江戸時代からのものが残っている④．いくつかあった旅館が大正末期に二つの旅館に買収されたので，道をはさんで，2軒の建物が錯綜し，これを橋⑤や廊下でつないでいる．同じ屋根の下でも，廊下を間違えると隣の宿へ行ってしまうという．寺⑥の名は善名寺で，僧行基が開いたという．③は船作りの神をまつる軽野神社．

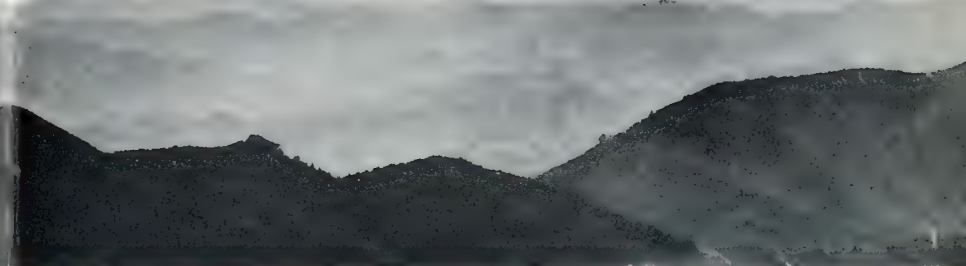
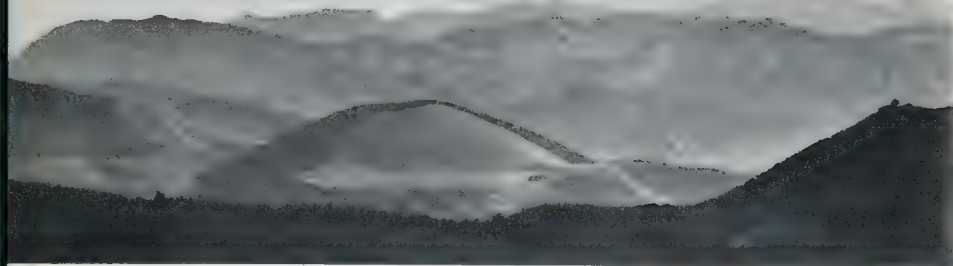
山村の生活

口伊豆の平野をあとに、狩野川の谷をのぼると天城の峠にでる。この道はかつてモミ、ツガ、ケヤキ、ナラなどの原始林でおおわれた昼なお暗い山路であった。これらの木は伐って海に出し、船材に用いられた。古い記録にもそのことがみえている。幕末の洋式船、君沢型帆船も、天城の材を使って造られたものだ。しかし、いまは天城の森林は多く杉に更新されつつあって、明るく平凡になり、幽谷の趣は少い。それでも、どこやら人の心をひくものがある。人々がしっくりとその土地に結びついて生活しているためだろうか。あるいは、南の空の明るさの故であろうか。この山ひだの谷あいや山腹に住む人たちは、木を伐り、炭を焼き、森のなかに椎茸のボタ場を置き、清水の湧き流れるところではワサビを作り山の幸を生かしている。「伊豆の踊子」の作者が出会った旅芸人の一行も、ハンの木の緑につつまれたワサビ沢を眺めながらこの街道を歩いたことであろう。いまはそのような旅芸人の姿も見かけない。しかし、バスが埃をまきあげ、街道ばたの家がそれをあびつつも、未だ山村は素朴である。

狩野川に沿った温泉群のうち最も奥の湯ヶ島には山の湯の静寂さと健康さがある．渓流のなかの露天風呂①に入る人も，岩に立って思切り手足をのばしたいような衝動を感じるのであろうか．廻らされた板囲いも映画のロケーションのためにわざわざつけたものだ．街道に沿っては，土産品を売る店もあり，小さいながらもパチンコ屋もある．しかし夜にでもなれば，隣の旅館に行くにも懐中電灯をたよりに暗い道を行かねばならぬほどで，バス道をそれて旧道を歩けば④そこにはやはり山村の生活がある．「伊豆の踊子」を看板にする旅館③や，旅芸人でも泊っていそうな旅館⑥が目を引く．立派な設備を持つ大きな旅館もあるが，その存在はむしろ唐突にさえ感じられる．⑤はハリスが江戸へ上る時宿にした部落の外れにある寺．②は温泉のボーリング．

湯ヶ島の部落を外れると木材を伐り出す作業場⑥や伐採小屋⑤がみられるようになり，山中に入る感じが強くなる．出会うのはトラック⑦かバスが多い．この山で随一という浄蓮の滝①③は裏からも見られ，この附近に群生するジョーレンシダは他に類がないもの．しかし滝そのものはなんの変哲もない．溪流の美しさなら猫越川②だろう．この川が源を発する猫越山系は第三紀世に出来たもので，この地層に属する地域からでる貝殻石④は，この半島がかつて海底にあった証拠だ．猫越川上流にある持越には伊豆最大の持越金山がある．

山　の　幸

ワサビや椎茸の栽培は耕地の少い伊豆の農家がとり入れた副業だったが，いまでは，ワサビ栽培は専業とするものが多い．大規模なところでは，数町歩のワサビ田を持ち，県下の高額所得者ベストテンに入るものもあるという．しかし，苗を石で押えて田に入れてから①，花が咲き③とり入れる⑤まで早くて1年半はかかる．その間，きれいな水に洗わせハンの木などで日差しを弱めて育てる．収穫したものを家に運び⑥，一部は刻んで⑦，酒かすとまぜ，出荷する．椎茸の栽培②も取入れ④まで3年はかかる．

天　城　山　へ

湯ヶ島から南伊豆にぬけるには，天城トンネル（長さ422 m）②③を通る．このトンネルが明治末期にできてから伊豆の南北を結ぶ道は楽になった．トンネル附近から東へ進むと，なだらかな林道が八丁池附近までつづき，天城山への登山道の一つになっている．天城山は昔から良材のでることで知られ，江戸時代には松，杉，檜，楠，扁柏，樫，欅など９種類の木は公用以外には伐採しなかった．江戸幕府の御林であったためで，それが深山の感を一そう深くしていた．いまは，国有林となって，林道があちこちに通じ，山の木の種類もだいぶ変った．林道が発達しているため登山者はしばしば道を誤ってしまうという．天城山を登るにつれ四周の展望も次第に開けてきてやがて南伊豆の海が見えてくる．①④⑤⑥はいずれも八丁池へ至る途中の景観．

天城山はといっても一峰の名称ではなく，万三郎岳(1405 m) ④をはじめとする諸峰の総称である①．火口は破壊されているが規模は想像できる．火口原湖八丁池③は珍らしい森青蛙の棲息地として知られる．山の中腹から北を振り返えると②，富士，達磨山を望み，南側の斜面からは猫越山系や下田附近が遠く望まれる．

奥伊豆

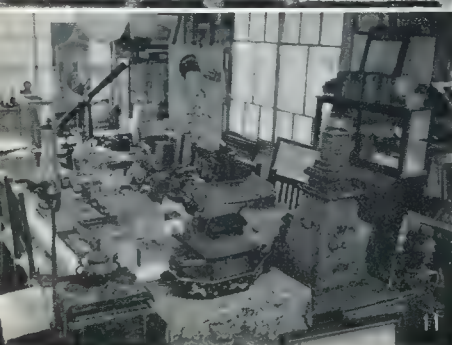
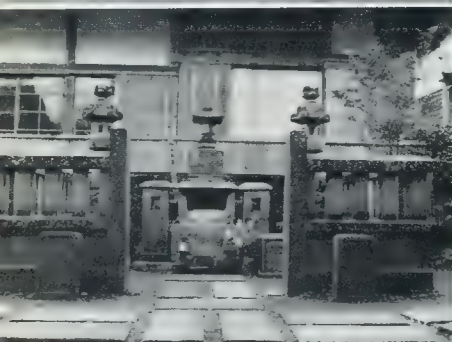
天城、猫越の山なみを境にして伊豆は南北に二分され、天城峠を南へ下ると河津川の谷になる。風景は急に森閑とした素朴なものになる。訪れる人が少いからである。天城の山が北と南の交通をどんなに大きくはばんでいたかは、バスが通るようになっても、奥伊豆には、まだ古い伊豆の匂が消えていないことでもわかる。しかも、そこには、伊豆の温泉のほぼ半数が分布し、湯量も豊富である。しかし、訪れる人の少いままに、温泉が旅客のものになっていない気安さがある。村人は心から湯に親しみ、またありあまる湯やその熱を利用して、製塩をし、メロン、野菜などの温室栽培、菖蒲などの露地促成栽培を行っている。温泉が土地の人々の生活に密着しているのだといえよう。そんな風景がまたかえって閑寂を愛する旅人の心をひく。それに、奥伊豆は江戸時代のはじめ以来、金を多く産出し、集う人も多く、くらしもゆたかで開放的進取的だったという。金が出なくなって人々が去った後もこの明るさは村人のなかに残った。その上、リウビンダイ、浜木綿などの亜熱帯植物が南国的な趣をそえている。

熱川 初景滝 大滝 湯ヶ野 峰 稲取 谷津 河津浜 縄地 蓮台寺 白浜神社 下田 須崎 田牛

河津の七滝

湯ヶ島のあたりは雨の多いところだが，トンネルの南も雨が多い．南からの湿った空気をまともに受けるからだ．晴れていれば，太陽の光を浴びて明るい南国の感じは一そう強くなる．しかし，展望は思ったほど開けない．道は山腹をまいて曲折する．その道を下る旅人を慰めるのは初景滝①をはじめとする釜滝④大滝②など七滝とよばれる滝の群であろう．この地方では滝を“だる”という．恐らく“垂るる”からきたのだという．大滝には，滝とならんで温泉が流れている．湯の温度は低いというが，それでも，滝のしぶきを浴びながら入る露天風呂⑤の風情は捨てがたいのであろうか，ここを訪れる人も多いという．そのそばの岩をくりぬいた温泉の洞③⑥もここ独特のもの．附近の旅館にきけば案内してもらえる．

下　田　ま　て

湯ヶ野から下田街道を進み，逆川トンネルをぬける．稲生沢川に沿って細長い平地がのび，下田の町へつらなる①②．下田へ入る少し手前に蓮台寺温泉．吉田松陰が皮膚病を治すために滞在したところ．彼が宿泊した家③は当時のままに残っている．唐人お吉がその狂った身を投げた場所といわれるお吉ヶ淵④は，この温泉の少し上流．下田富士⑤を廻れば，明るい下田の海が開ける．川口に集る数多くの漁船⑦をみても，下田が大きな漁港であることがわかる．松陰が密航を企てて日暮れを待った弁天島⑥は，海岸に近接した小さな島だ．

⑧安政年間，日米和親条約や日露和親条約を結んだ長楽寺．⑨ハリスの通訳ヒュースケンから写真術を学んだといわれる日本の写真術の創始者下岡蓮杖の碑．⑩宝福寺内のお吉の墓．⑪往時を物語るコレクション．

①明治初年に建てられた小学校．②幕末当時米人が撮影した領事館玉泉寺．③お吉の遺品．④下田開港の附帯条約を締結した了仙寺．⑤吉田松陰が渡航に失敗して拘禁された跡．⑥現在の玉泉寺．⑦ペリー記念碑．

開国文化の跡

下田は南伊豆のなかでは特殊な存在である。いまは漁港を中心とした人口四千の町にすぎないが、幕末に於ては東日本の唯一つの開港地として、外国との交渉の要地だったからである。江戸幕府が下田の開港を決意したのは、この地が江戸からだいぶ離れていて、その上、その間が山また山の複雑な地形であり、横浜を開くことに比べれば、ずっと心配が少かったためだといわれる。このような下田の地理的位置は、そのまま、現在でも下田が伊豆第一の良港といわれ、南伊豆の最大の町でありながら漁船の寄港地である以上には発展しない理由にもなっている。いわゆるヒンターランドを持たないこの港町は、他所の船で賑いながらも、あくまで消費の町である。それはともかくとして、この町にも多くの人が訪れる。この町が持つ開国文化の跡が人々の旅情をさそうのであろうか。当時の遺跡と、初代の米国領事ハリスにまつわる唐人お吉の物語は、この町の表看板であり、最近は毎年春になると町をあげて黒船祭という行事が行われ観光客を集める。

下　田　の　街

下田は古来，江戸へ向う西国の船の風待ちの避難港だったので，これらの船の人たちを迎えるところでもあった．したがって生産的というよりどちらかといえば消費的な性格をもつところだ．下田情緒ということも，このような点から生れてくるのだろう．この意味では夜の街②は下田を代表しているといえよう．しかし，人々の生活にふれたければ，薄暗い路地①も通ってみる必要があるだろう．またこの町は南伊豆の交通の中心でもあるので，バスの発着場⑥は人で賑い，町全体に活気を与えている．この町の特異な産業の一つはボタン作り⑤．あまり上等でないものはサザエの貝殻から取り④，貝殻の山は，この地を訪れる人の目をおどろかす．③は町外れにあった旅館．踊子の物語にも，こんな名前の旅館がでてくる．

①下田から神子元島(左)を望む. ②④, ③は熱川からそれぞれ大島, 利島の方面を望む.

伊豆の海は明るい. しかも, 東海岸から南海岸にかけては, 伊豆諸島が望まれ印象的だ.

4

2

南　海　岸

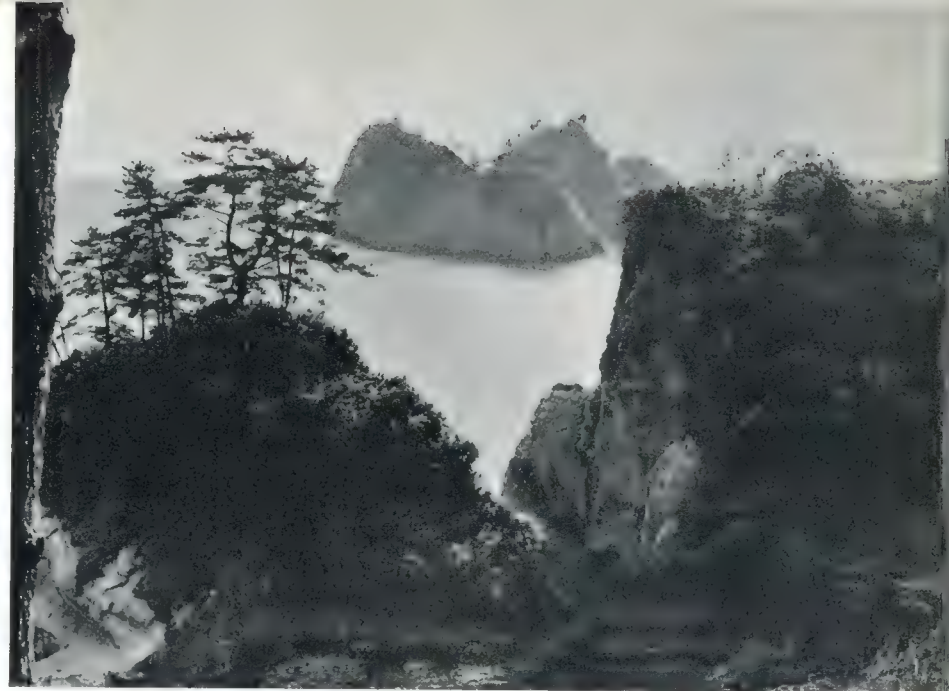
南伊豆の海岸は波濤の侵蝕により海岸線が一般に複雑だが，なかでも，大瀬①から石廊崎⑥にかけては，特にはげしく，海岸の風景のすばらしいところとされている．石廊崎の突端には灯台⑦が古くから建てられ，舟人の守神石廊権現もある．この岬で風波を妨げられる長津呂の港⑧は小さいながら昔から避難港として知られており，街③もどことなく古い感じをのこしている．南海岸は天草をとる海女の姿が多く見られ，初夏から秋にかけて海岸は人で賑う．②④は大瀬海岸の所見．⑤は海に面した中木の郵便局．

南伊豆では，温泉の産業利用が大規模に行われている．下賀茂温泉①②④に見られるように，噴湯から塩をとったり⑥⑧，温泉熱を利用しての果実などの促成栽培がさかんに行われる．もともと暖地なので，温泉のないところでも温室を作って③，メロン，バナナなどの促成栽培をしている．⑤⑦はこのような地理的特性を生かして，熱帯植物を研究している南崎の熱帯植物園の一部．

西海岸の村

西海岸は山が直ちに海にせまり、その上、達磨、猫越などの古い火山の活動と侵蝕、隆起、沈降がくり返えされたため、海岸線は、多くの小さい屈曲を持ち、その一つ一つの浦に民家が密集している。戸田、土肥、宇久須、安良里、田子、松崎、及び、いわゆる三浦、三浜がそれだ。これらは、各々その性格がちがっている。そこに住みついた人々がいろいろのところから移ってきたからである。背後の山を下ってきた人々の集落、海を越えてきたところ、漁業を主としたもの、航海業を主な仕事とした村などと、いろいろの要素を持っている。しかも、陸上の交通は長くはばまれていたため、一つ一つの浦が孤立的であった。人々は背後の急斜面をひらいて田畑を作ったが、食料の何ほどのたしにもならず多くは海に頼らねばならなかった。海こそ彼等が自由にかけめぐり得た世界だったのである。人々の活動する漁場はひろく、女たちも海藻採取にはげしい働きをする。西海岸は温泉も土肥一つの淋しさで、このことと陸の交通の不便さとのため都会人の訪れも少く、村人は昔ながらの生活を守っている。

6

西海岸の地形の特徴は宇久須附近⑤によくでている．良港は少く妻良①は子浦とともにその少い一つ．昔は下田とならんで栄えた避難港だったが，いまは南部の中心は田子，松崎に移っている．いずれも鰹節の産地．松崎は畳表③，蚕種④の産地としても著名．入間漢語という特殊な方言の残る入間②⑥は半島の南端に近い．「寒いから炉辺へ寄れ」を「寒困炉辺近着（かんこんろへんきんちゃく）」などという．

堂ヶ島附近①は，西海岸の他の特徴を示す．風光はよく，岩にあいた洞をくぐる遊覧船②もできているが，西海岸の人たちの生活の基盤はこのような観光にはない．陸では鰹節を作り③，炭を焼き④，わずかな段々畑をたがやす．⑤〜⑧はいずれも，岩科で見たものだが，きびしい生活が感じられる．科というのは段々を意味するという．葬儀⑧もだいぶん他のところとはちがっている．

大謀網②を上げに行くときの漁師はいつも期待に胸をふくらませている．まだ夜も明けきらないうちに網のあるところまでいく③．網を引きよせる．やがて魚が腹を見せて飛上る．『今日はたくさん入っているぞ』網をしぼる手にも力が入る．魚が群ってさかんにはねる④⑤．それを引っかけて船に入れる頃，日がのぼる．魚を一杯積んで，船は港へ帰る①．水揚はどのくらいだろう．

海に生きる

伊豆の海は大きな魚が多く、とる人の心を勇ましくする。たとえば、西海岸の安良里港のせまい入口へイルカの群がよく押しよせる。すると、浦の入口を網で仕切っておいて、人々が海にとびこみ一匹一匹抱いて渚に上る。まことに古風な漁法である。

また、三津浜へはマグロがよく入った。これも浦の入口を網でふさいでとる勇壮きわまりないものだった。マグロやブリの漁は大謀網が作られてからはそれでとるようになり、仕事は楽になったが、海岸へ寄る魚は減ってきたという。カツオもこの海にくる。安良里、田子、伊東がその漁業の根拠地であり、人々は遠洋漁業にもでかける。下田や網代にはそのカツオ船に生餌を供給するための生簀がみられる。このような伊豆の漁場を目指して他の地方からも船がたくさんやってくる。その寄港するところが下田である。漁船が動力化していわゆる後家縄の哀話は消えたが、昔は冬の海にブリの延縄に出かけて帰らない人が多く、大きな時化があると一ぺんに壮年の村人が多く死んだ。そして、村には後家ばかりふえた。しかし、後家はその子が成長するとやっぱり海に出した。その子たちは、いま太平洋を自由にかけめぐって魚を追っている。伊豆では勇敢に海に進出し、また漁業経営に進取的な村がゆたかに暮してきた。稲取、白浜も、海藻採取の共同経営で模範村をつくった。海あっての伊豆である。

漁場に近い魚市場④は，消費地の場合とはちがって，せりは直接消費者の手に渡る小魚だけだ．船から水揚される大きな魚⑥⑦は，協同組合が荷受人となって買手を探す．魚の水揚が終れば，遠くに出かける船はまた氷を積み込んで出発の準備をする⑤．陸へ上げられたサバ，アジ，イワシなどは多くは干物にされ①②③，他の地方へ出されたり温泉へくる客の格好な御土産品になる．

東海岸ーバスの旅ー

伊東市
川奈
一碧湖
小室山
矢筈山
大室山
万二郎岳
八幡野
熱川
稲取
河津浜
縄地
白浜

伊豆半島では鉄道の通じているところはほんの一部にすぎない。比較的開けている東海岸でも伊東から南はバスに頼る外はない。それだけに、この半島に於けるバス路線の発達は驚くほどで、あまり良くない道路を大型バスが縦横に走っている。半島に都会の風を運んでくるのもバスである。新聞も郵便もバスが運んでくる。伊豆の旅はバスの旅である。なかでも、海を眺めて走る東海岸の旅は伊豆を訪れる人に忘れ難い思い出を残すにちがいない。下田から伊東までは急行で二時間の旅である。東海岸は西海岸といろいろの点で異っている。西海岸の風光のかなめが富士山だとすれば、東海岸ではそれは大島、利島の遠望だろう。住む人たちも、東海岸では、南部を除くと、多くは口伊豆から峠を越えて移り住んできたものだといわれる。しかも、近世に於ては、これらの東海岸の人々は、海路、江戸に魚や伊豆石を運び、このことにより江戸との交渉も深く、一時は江戸風が巾をきかせた。西海岸が紀伊とつながりをもって、西国との交易地として栄えたのと対照的である。

下田から熱川へ

下田を出て切通しをすきるとやがて東海岸の海①が見え，天草て名高い白浜へ入る．毎年5月から10月までの採集期には，海岸③は海女と採集船で賑う．浜の中央に森にかこまれた白浜神社②は伊古奈比女命を祭り，三島神社の后神の宮てある．夫神はここから三島へ去ったのだという．白浜をすきるとやがて縄地⑦，慶長の頃金山奉行大久保石見守長安がさかんに採鉱したところ．いまでも金をとっている．④はその鉱滓の捨て場てある．⑤は河津川の川口，河津の浜．⑥は伊豆七島へ通する海底電線の上陸地点．

河津浜から稲取町，片瀬温泉をすぎると，熱川温泉①．海のある温泉として浴客をよろこばす⑦．熱川といってもそこを流れる川⑥は濁川という名だ．ここでは最近洋蘭の栽培③がさかんで，良いものは１株数万円にも売れ，アメリカなどへ出す．河津の浜から川に沿って上った辺りは曾我兄弟の育ったところ．その父，河津三郎を祀る神社には，彼が力を練ったという手玉石⑤がある．さらに進むと谷津温泉．家康の側室お万の方の生地でいまでもその祠④がある．谷津に近い峯温泉は花菖蒲の栽培②で知られる．

熱川から川奈へ

熱川をすぎ，北川の部落を通りぬけると，対島村に入る．大島に対する村という意⑤．八幡野の海岸②からは天城の連山が遠望される．このあたりから道は海岸をはなれ，先原三里とよばれる原⑥がつづく．天城の側火山大室山の東南の斜面に当り，流れでた溶岩の跡は海岸に見事な柱状節理を見せ⑦，原には大きな木は育たない．富戸の海岸③には日蓮が置き去られたという俎岩があり波で洗われている．道を左へ折れると火口湖，一碧湖．伊東ゴルフ場①があり休日は賑う．④はイノシシ除けの石垣である．

川奈口②より右へ入ると川奈⑥．ここには，漁師彌三郎が俎岩から日蓮を助けてかくまったという御岩屋④がある．海に臨んだ台地にある川奈ゴルフ場①は広大な面積をもっているが，川奈ホテル③とともに，一般の人たちにはあまり縁がない．ゴルフのクラブへの入会金は20万円だという．川奈のあたりまでくると，やっと初島が見えはじめる⑤．初島は熱海火山の外輪山の名残りだといわれ，小さいながら特異な島である．川奈湾の北に当る伊東の汐吹岩⑦では，洞穴に満潮時波が打ちつけるとなかの空気が圧迫されて海水が吹上る．

温泉のある都市

温泉地の発展には交通の便不便が大きく影響する。伊東温泉はその良い例だろう。昭和一三年に国鉄がここまで通ずるとともに急激に発展し、現在では温泉のある都市として四〇〇を越える温泉源泉をもち、多くの浴客を吸収している。もっとも、伊東は単なる消費都市ではなく、東海岸に於ける水産業の中心地でもある。しかし、市民の産業別世帯数では、温泉旅館などのサービス業がやはりその第一位を占め、卸売小売業がこれにつづく。漁業水産養殖業は第三位になっていて、この市の性格を物語っている。市会議員の約三割は温泉旅館の関係者だというから市政にも温泉業者の意見が相当反映されていると考えてよいだろう。四万近い人口を持っているので、温泉に直接関係のない市民も多いが、これらの市民にとっても、温泉は日常の生活に役立っている。銭湯はもちろん温泉だし、また自宅の浴室に温泉を引いている人も少くない。台所にさえ温泉が入っている家もある。それにしても、温泉旅館の立派さに比べ、共同浴場が貧弱なのは、温泉は温泉客のためという考えからであろうか。

3

伊　　東

伊東①は，伊豆の豪族伊東家の支配下にあったところ．頼朝が伊豆で挙兵したとき，領主伊東祐親が平家に加担して破れ，その墓③が市内にある．市制がしかれて7年，市内は温泉客と市民が交錯し，1日平均約1万人の浴客を呑吐している．しかし東海道線が走る熱海市に比べると，その約$\frac{1}{3}$．それでも市民4人に対して温泉客が1人弱の計算になり，繁華な通り④はいつも賑っている．市の学校には温泉シャワー⑥の設備のあるところもあり，国立療養所でも温泉を治療に使っている⑦など，市民と温泉との関係は深い．温水に大うなぎなどの魚がすむ浄の池⑤は，一般の人にはあまり興味がないらしいが専門の学者には珍重される．②は慶長年間わが国初の洋型帆船2隻を三浦安針（ウイリアム・アダムス）が建造したあと．

5

6

7

伊東では，温泉客も，市民も温泉と海を楽しむ．25 m の長さを持つ屋内温泉プールは浴客ばかりでなく大学の水泳部などがシーズン前のトレーニングにもやってくる．海岸の温泉プールは野天だけにさすがに寒いうちは人影もないが夏になると子供たちで一杯だ．温泉場といっても規模が大きいだけに，遊ぶための施設も多種多様で，特に夏は海水浴のできる温泉地として訪れる人をよろこばす．温泉につかった御土産は，干物，ワサビ，ミカンといずれも伊豆の名産．これなら実用的だし，留守番の家人にもよろこばれるという勘定だ．

岩波写真文庫目録

1＊木綿
2 昆虫
3＊南氷洋の捕鯨
4＊魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10＊紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19＊川—隅田川—
20 雲
21 汽車
22 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都—歴史的にみた—
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院（一）
41 彫刻
42 仏像
43＊化学繊維
44 蛔虫
45 野の花—春—
46 金印の出た土地
47＊東京—大都会の顔—
48＊馬
49 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52 醤油
53 文楽
54＊水辺の鳥
55 米
56 正倉院（二）
57＊石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64 オーストラリア
65＊ソヴェト連邦
66 能
67＊造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良—東部—
87 奈良—西部—
88 ヒマラヤ
89 上高地
90＊電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94＊自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97＊システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105＊宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内—洛中—
109 京都案内—洛外—
110 写楽
111 熊
112 東京湾
113 汽車の窓から—東海道—
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123 アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126＊貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132＊日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる—空から—
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅—桑原武夫—
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年—秋田—
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 —1955年10月8日—
184 練習船日本丸
185 悲惨な歴史—ドイツ—
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる—空から—
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道（南部）
208 小豆島
209 日本 —1956年8月15日—
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道（東・北部）
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 麦積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州—大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道（中央部）
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 —1957年4月7日—
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷—潮来—
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県

新刊

256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県

＊印は品切でございます

熱海

伊豆半島 38

下　田

¥ 100